

学 校 評 価 書

総社市立山手小学校

校長 中司 康彦

(公 印 省 略)

【1 自己評価】

I 評価結果

(別紙参照)

II 分析・改善方策

1 心プロジェクト

(1) 心豊かな児童の育成

○「だれもが行きたくなる学校づくり」の実践や「特別の教科 道徳」の授業を通して、思いやりの心や自己有用感を育成する。

品格教育と関連づけた「特別の教科道徳」の授業の充実、縦割り班活動を中心としたピア・サポートやSELの授業の取組、月目標・週目標の遵守や振り返りを大切にした生徒指導、友達に優しくされていると感じられるような「きらりカード」の取組、なかよし遊びを通して、自分や友だちのよさを認め合い、思いやりの心が育めていると言える。アンケートでは「思いやりの心が育っている」との回答が、児童91%、保護者90%、教職員97%であった。「自分の子は友だちから優しくされている」についての回答は、保護者94%であった。昨年度と比べ、肯定的意見の割合が高くなっている。しかし、「学校はいじめの対応等人権に配慮した対応をしてくれる」についての回答は、児童76%、保護者65%であり、昨年度より児童の肯定的意見は高くなっているが、保護者の肯定的意見は低くなっている。

「自分の子は思いやりの心が育っている」、「自分の子は友だちから優しくされている」についての、保護者の肯定的意見の割合が高くなったのは、ピア・サポートやSELの授業の取組等での、児童の様子、充実感、変容等を保護者や地域に、学校日より、学年・学級日より等で、定期的に発信したことも理由の一つと考えられる。今後も継続して発信していく。児童が友達からのサポートを実感できるようにするための「きらりカード」の取組や、帰りの会での「良いこと見つけ」の取組、なかよし遊びを、より工夫しながら引き続き行っていくことも重要である。「特別の教科道徳」については、若手教員が中堅教員の授業参観をする取組や、校内研修等は継続していく。人権に配慮した対応が保護者の肯定的評価が低いことに対しては、家庭訪問も含め保護者へのこまめな連絡を徹底していく。「分からない」と回答した保護者が多いことに対しては、人権に関わる学校や学年の取組を、保護者や地域へ回数を増やして発信したり、分かりやすい内容に工夫したりすることが必要である。また、保護者に答えやすくするため、アンケートの質問内容の変更も検討中である。今後も全児童への定期教育相談や日常の児童観察を大切に、児童の情報を共有して保護者や関係機関との連携・協力によるケース会議等も積極的に行うことで、見守りが必要な児童の悩みや不安の解消に一層努めていく。

(2) 「す・き・だ山手小学校運動」の推進

○「す・き・だ山手小学校運動」(進んであいさつ、きちんと整頓、だまって考えて掃除)を通して、礼儀正しい児童を育成する。

今年度の重点的な取組である「あいさつ」については、週目標への設定、教師の率先垂範、児童会や児童のボランティアを中心とする主体的な取組、地域住民の協力等により実践力も高まった。アンケートでは、「あいさつがよくできる」との回答が、児童84%、保護者71%、教職員82%であった。また、「使った物を片付けたり履物をそろえたりする」については、児童89%、保護者49%、教職員87%、「黙って考えて掃除ができる」については、児童89%、保護者63%、教職員87%であった。

あいさつや清掃の大切さや気持ち良さが分かるような指導を継続し、さらに学期末ごとにあいさつ名人やそうじ名人の表彰を実施した。本年度は、総社東中ブロックの取組として、中学生が参加す

るあいさつ運動を各小学校で実施することで、山手小学校では5・6年以外の学年もあいさつ運動に加わるなど、子どものやる気を喚起することができた。また、はきものの整頓については、意識付けのための掲示や日々の声かけ・点検・評価等を全校で取り組み、徹底を図った。校内での取組の成果はあった。また、教職員が児童に、家庭生活でも実践できる力として身に付けていけるよう呼びかけたため、保護者の肯定的意見の割合も、昨年度より約10%高くなった。しかし、まだ保護者の肯定的評価が低く、保護者への周知の徹底と、保護者のより一層の協力が必要となる。心豊かな児童の育成を図る上で、「なぜその行動をするのか」、「実践するとどうなるのか」という行動の目的や価値をしっかりと伝え、その必要性や重要性を児童が理解し、実践できるようにすることが大切である。そのためにも、全職員が常に意識を高め、共通理解をして指導にあたることがさらなる成果へつながるものと考えている。

2 学びプロジェクト

(1) 確かな学力の育成

- 「岡山型学習指導のスタンダード」や「算数の授業づくりははじめの一步」を基に授業改善を図り、考えたことを様々な方法で表現できる児童の育成を目指してわかる授業を実践する。

本年度、研究テーマを「基礎的な力を身につけ、自分の考えを筋道立てて表現できる児童の育成～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた算数科の授業づくりを通して～」とし、算数科の授業力の向上を目指して取り組んできた。

「岡山型学習指導のスタンダード」「算数の授業づくりははじめの一步」を基本として、効果的な協同学習に積極的に取り組みながら、さらに導入の工夫や学習過程の充実、振り返りの工夫、話したくなる・書きたくなるテーマの設定等を大切にして、児童が主体的に取り組む授業を目指して改善を進めてきた。アンケート結果を見ると『岡山型学習指導のスタンダード』を基本に学習課題の設定や評価の仕方についての工夫や改善に取り組んだ」という教職員の自己評価は100%、「『めあて』『ふりかえり』を意識した授業を行った」という教職員の自己評価も100%となっており、全教職員が『岡山型学習指導のスタンダード』を意識して、本年度の研究の方向性を理解し、授業改善に懸命に取り組んだことが分かる。そして、今年度、相互授業参観の取組を行い、教職員各自の授業改善につながるなど、一定の成果を出すことができたため、来年度も継続していきたい。「わたしは自分の考えを話したり書いたりできるようになっている」では、児童86%、教職員100%が肯定的な回答をしている。また、「難しい問題でも最後まであきらめずに解こうとしている」では、88%の児童が肯定的な回答をしている。さらに、全国学力・学習状況調査において、昨年度まで算数の平均正答率が全国平均より低かったが、今年度、国語、算数とも平均正答率が全国平均を上回ることができた。家庭学習時間は、平日2時間以上行っている児童の割合が全国平均より低い、平日1時間以上行っている児童の割合が全国平均とほぼ同じであった。

来年度、授業にミニ作文を書かせたり、考えを発表する際にその考えになった理由を言わせたり、振り返りを細かに行ったりする取組は継続していく。また、宿題の出し方等を工夫することで、家庭学習時間を増やしていきたいと考えている。さらに、6年生は、長いスパンで宿題を出したり、自主学習に力を入れたり、中学校生活を見据えた取組も継続していきたい。そして、これらの取組について、「何のためにするのか」、「この取組をすればどうなるのか」を児童にしっかり説明した上で行っていきたいと考える。最後に、あらゆる授業の中で、児童一人ひとりの思考の過程を大切に見取りながら、主体的に思考・表現できる児童の育成を目指していきたいと考える。

(2) 特別支援教育の充実

- どの子にも分かりやすい授業づくりを意識するとともに、個別に支援を要する児童について共通理解の場を設け、全職員で全児童を支援できるようにする。

各学級において特別支援教育の視点を生かした教室環境づくりや授業づくりに取り組むとともに全職員で全児童を支援できるようにするため、教育支援委員会や生徒指導委員会、終礼等児童の情報を共有する場を設け、共通理解の下に支援してきた。また、特別支援教育講師、特別支援教育支援補助員と緊密に連携し、個々の児童の実態に応じた支援を行ってきた。教職員へのアンケートでは、「特別支援教育の視点を取り入れた授業・支援に取り組んだ」という回答が96%であり、常に意識をして授業や支援に取り組んできたことが伺える。

視覚化、焦点化、共有化のユニバーサルデザインの視点を取り入れ、実物や動画使用など教材提示装置やパソコン等 I C T 機器を活用したこと、学習に集中できるような掲示・席等の教室環境の整備に取り組んだことや児童についての情報や効果のあった指導法を共有したこと、1 時間の授業の流れや活動全体の見通しを教師が示していくこと、視覚的支援を積極的に行うこと、短い指示を行うこと、学ぶ内容をはっきりさせること等が有効であった。効果ある取組は継続すると共に、来年度は、一人の考えを他の子どもに伝え、理解や指導を深める工夫をし、話し合い活動を組織化する「共有化」を重点取組として、児童が分かる・できる授業を実践していきたいと考えている。

3 元気プロジェクト

(1) 体力づくり

- 休み時間や教科体育を通してたくさん運動しようと意識できるような取組や児童がめあてをもって運動に取り組むことができるような指導を行う。

体力づくりについては、「体育の学習時間たくさん運動している」では、肯定的な回答が児童 92%, 教職員 100%, 「業間休みに外に出て活動している」では、肯定的な回答が児童 86%, 教職員 97% であり、概ね達成したと考えられる。体育科の授業では 3 分間走を実施し、業間休みでは期間を決めた縄跳びやペース走等を計画的に実施することにより、児童一人ひとりが運動量を確保できるよう努めた。また、長縄を使った 8 の字跳びでは、岡山県チャレンジランキングに加入し、児童のやる気につなげた。そして、がんばりカードを活用しながら、児童の主体性を育み、全校で計画的に取り組んできた。来年度も児童のやる気につなげる取組を継続して行い、児童が楽しく、意欲的に体力づくりができるようにしたいと考えている。

(2) 基本的生活習慣の定着と健康作り

- 基本的生活習慣（早寝・早起き・朝ご飯）の定着をめざし、家庭と連携をしながらメディアの適切な利用の意識を向上させる取組を行う。

「メディアコントロール週間では、家族と決めた自分のめあてを守ろうとしている」では、児童 85%, 「メディアコントロール週間では、メディア利用や睡眠時間について話題にしたり、声かけをしたりしている」では、保護者は 81%, 教職員 100% という結果であった。学校では、メディアコントロール週間直前の保健委員会の児童による広報活動や担任による学級指導を実施したことで、児童の守ろうとする意識は高まった。メディアコントロールを実際に取り組む場は家庭であるため、保護者の協力は不可欠である。家庭で話題にし、声を掛けてもらえるように学級懇談や保健便り等で取り上げてきた。また、より多くの保護者がメディアコントロールに関して意識が高まるように、引き渡し訓練と講演会を組み合わせ、多数の参加を得ることができた。さらに、学校保健委員会で、子育てとストレスマネジメントについて、臨床心理士が講演を行い、講演後、30 名の参加者が活発に意見交換を行った。しかし、前向きに取り組む家庭と、取り組みが難しい家庭との差を感じている。メディアの利用については、学校での学級指導等で今後も継続的に指導し、児童自らがメディアコントロールできる力を育てていくと共に、家庭での一層の協力を得られるよう働きかけの工夫をしていきたいと考えている。そして、総社東中学校区で共通した小学校の取組も、継続して考えていきたい。

4 地域連携プロジェクト

(1) 開かれた学校づくり

- 各種通信やホームページ等を通して教育活動の様子や子育てに役立つ情報を発信していることを多くの人に知らせる。

学校便りや学年便り、ホームページで教育活動の様子を発信し、保護者や地域にとって役に立つ情報誌やホームページづくりに努めてきた。その結果、「ホームページや学校便り、学年便り等の各種通信により、学校から発信した情報が役に立った」の回答では、保護者の肯定的回答が 90% になった。今年度も山手公民館に加え、山手ふれあいセンター等の地域住民がたくさん集う場所に学校便りを掲示することにより、より多くの人に教育活動の様子や、学校からの情報を伝えていくようにしている。ホームページ上には、学校便り、学年便り、保健便り、PTA 便り、行事・下校時刻予定表等の各種便りを定期的に載せるようにしている。役立っているという回答が多いため、今後は速やかに更新できるようにすることが課題である。担当者の負担を考慮しながら、記事の作

り方、更新の仕方等を工夫することにより、最新の情報を定期的に届けることができるようにしていきたい。

(2) 学校支援ボランティアを積極的に活用する

○ 学校・家庭・地域で連携して児童の健やかな成長を目指すために学校支援ボランティアによる支援の機会を増やす。

学力向上や環境美化等あらゆる活動場面で学校支援ボランティアを依頼し、教育活動の充実を図ってきた。その結果、児童の88%が「ボランティアの方と一緒に学習するのは楽しい」と回答しており、保護者アンケートでも94%が、ボランティアの支援が役立っていると回答し、昨年度より8%高くなった。これは、意図的にボランティアの活躍を学校だより等で発信しているのも理由の一つと考えられる。また、「学校支援ボランティアの方の有効な活用に努めた」との回答は、教職員96%であり、達成していると考ええる。学校支援ボランティアの活動内容やその有効性については、児童・保護者ともにより周知されたと考えられる。

学校支援ボランティアを増やす取組として、PTA総会で参加を呼び掛けたり、募集のチラシを配布したりした。また、ボランティアへ方々が、より意欲的に取り組むことができるよう、活動する日に校内放送で児童に伝えること、学校だよりにより児童の感想や感謝の気持ちを載せること、児童が直接ボランティアの方々と対面し、自分の言葉で感謝の気持ちを伝えること等、様々なやり方で行っている。今後も、支えてくれる地域の方々への感謝の思いや、ふるさと山手への愛着の思いが、より高まっていくよう、よりよい方法・やり方を継続して考えていく。

【2 学校関係者評価者名】

竹田 祥郎（学識経験者）	尾崎 啓一（山手公民館 館長）
田中 真秀（大阪教育大学大学院 特任准教授）	友野 玲子（主任児童委員）
劔持 江利奈（主任児童委員）	横田 友則（山手小PTA会長）
上田 陽子（山手小PTA副会長）	

【3 学校関係者評価】

① 心豊かな児童の育成

「思いやりの心」については、学校生活を通して子どもに育っており、日常生活やピア・サポート場面で基準が達成されていると見受けられることから、一定の成果があったとして自己評価は妥当である。今後も、「キラリカード」や「良いこと見つけ」といった取組を通して、子ども達の自己肯定感を育成し、心の安定を図ってもらいたい。「学校が楽しい」といった点に対して教職員の評価が高いことは良い点であるが、全ての児童が「楽しい」と回答していないことについて教職員全体で検証を行ってほしい。例えば、児童が学校に登校する際に抱える不安等を保護者が感じていることもあるので、保護者と連携しながら意識した対応をしてほしい。「学校が楽しい」と回答していない児童・保護者の「サイン」や「気づき」に十分に配慮して100%を目指してほしい。学校のトラブルについては、教職員と保護者が一丸となって考え、時には子ども達自身で解決する力を身につけるように促すことを通して、子どもたちがより人の気持ちを理解できるようになると期待する。

「人権に配慮した対応」については、児童と保護者の回答が低いことに対しては、「何が人権に配慮した対応なのか」といったことが伝わっていない可能性もあるので、「人権に配慮した対応とは何か」を教職員全体で共通認識を図ってほしい。特に、保護者は児童を通した情報に依存している場合があり、学校での活動・対応が正しく掴み切れていない部分もあるので、教職員と保護者が家庭訪問等を通して連絡をとりあってほしい。また、保護者によっては、学校から具体的な対応を受けていない場合、回答できない場合があっ

たので、アンケート項目の改善を図ってほしい。

② 「す・き・だ山手小学校運動」の推進

「すきだ山手小学校」については、挨拶、返事、履物、掃除等、生活習慣や人間関係に関する重要な事項が盛り込まれており、児童・教職員の回答からは概ね基準が達成されていることから、自己評価は妥当である。一方で、「履き物」や「掃除」の保護者の回答が低いことは、実態として行われていないのか、学校での取組が保護者に浸透していないのかを把握することが大切である。児童が「できている」と認識していても、保護者から見ると物足りない場合は、達成に向けて学校と保護者が連携する取組をさらに進めてほしい。児童や保護者にとって学校が特別な場ではなく、「学校でも家でも」同様の行動ができるという意識が大切である。

「心プロジェクト」では、評価の客観的指標としては行動面を基準として評価されがちだが、「心」という情緒や認知について、「なぜその行動するのか」という根本を児童に伝えようとする学校の姿勢を継続して行ってもらいたい。何のために「履き物」をそろえるのか、「挨拶をするのか」について子どもが理解することにより、保護者も気づくことができるのではないかな。心の教育は、学校教育と家庭教育での習慣が大きく影響することを考慮すると、保護者の協力を得ながら、家庭や地域でのつながりを意識し、児童の様子を情報共有することも大切である。

③ 確かな学力の育成

全職員で全児童を支援する取組がなされているので、自己評価は妥当である。今後も個々の児童それぞれにニーズがあるということを意識して、児童理解に基づいた授業計画・実践・改善を行ってほしい。児童の基礎学力の向上は教師の指導への努力によるものである。これからも校内研修等を通して、「良い実践」を共有してほしい。

「岡山型学習スタンダード」が定着していることは本校の取組の成果であるため、今後も継続してほしい。一方で、「スタンダード」の内容だけに留まるのではなく、発達段階や児童の状況に合わせた授業の工夫も、今まで以上に積極的に行う時期にきている。

自分の考えを発表させる時に、考えた理由について述べることは、児童自身の「つまづき」を知る機会にもなり、有効な教育方法である。加えて、学年の発達に合わせた指導を今後も心掛けてほしい。発達段階によっては、自分の意見を発表することが難しい場合や自己の考えや認識を表現できない場合もある。ミニ作文等の取組を蓄積することで、児童自身が自らの成長を実感できるように心がけてほしい。

家庭学習や宿題については、児童の「学び」への意欲を高める取組を継続して行ってほしい。特に、自主的に学ぼうとする意欲を持てるような宿題を学校全体で考えてほしい。児童が学習習慣を身につけることが、今後の児童の学力にもつながる。例えば、児童の考えを整理し、表現をする上では日記の宿題が効果的ではないだろうか。教職員全体で児童の意欲を引き出す取組を検討してほしい。

国語や算数の単元テストの結果等、基礎学力の向上が図られていることは教職員の努力による。引き続き取組を行い、来年度も算数の全国学力テストを平均点以上にしてほしい。学習の「振り返り」を行うことで、児童自身にとっても何を学んでいるのかが明確になっているため、素晴らしい取組である。

「頑張って最後まで解こう」という気持ちを継続して児童が持てるように、今後も過程を認める活動を続け、問題を解けた時の嬉しさや喜びを共感し、勉強する楽しさを醸成してほしい。「わかる」、「わかった」は児童の達成感と満足感につながる。

④ 特別支援教育の充実

学習の中で自分の考えを残す指導は、児童の自己肯定感を高めると同時に、児童が自らの考えを整理・表現する力につながる。児童自身が何をどこまで考えることができたのか、またどこでつまづいてしまったのかを認識することが次の問題を解くことにつながる。時代とともに子ども達の能力に格差が生まれる中で、わかりやすい授業を工夫していることは必ず効果を挙げるものだと思う。ペア学習等を通して、子ども同士が助け合うことで、自分の課題に向き合うことができるため、引き続き活動を続けてほしい。

「学びプロジェクト」は、年々取組が良い方向へ向いている。今後は、「評価⇒どう変わっていくか」を大切にしてもらいたい。また、児童に対して、途中であきらめたりせずに「当たり前」にする姿勢を引き続き養ってほしい。

⑤ 体力づくり

児童が運動を取り組むことができているので自己評価は妥当である。取組に興味を持つかどうかは「楽しさ」に左右される面もあるため、児童全員が運動を楽しいと感じられるよう現在の取組を続けてもらいたい。運動量の2極化は、児童の今後の身体の成長にも関わってくるため、運動への積極的な意識づけを行ってほしい。

全体的に外で遊ぶ子どもは少なく、体の動かし方も知らない場合もあるため、体育の授業を通して教員から技術的な指導も行ってもらいたい。また、業間休みの活動については、児童の中には教室で次の授業の準備をしたい場合もあるため、子どものニーズに合わせてもよいのではないかな。来年度からの目標項目に入れるのかどうかは教職員全体で検討してほしい。

⑥ 基本的生活習慣の定着と健康作り

基本的生活習慣の定着には家庭との連携が不可欠である。保健だよりの呼びかけ等の様々な取組を行っていることから自己評価は妥当である。メディアコントロールや「早寝早起き」については、家庭間でも差が大きいことから保護者の手本が必要である。学校は保護者に対して最新の情報を伝えることを意識してほしい。特に早寝・早起き・朝ごはんは家庭での取組であり、各家庭がどのように改善できるのかを考えることが必要となる。メディアコントロール週間は有効活用されているが、毎回内容が同じではなく、新しい項目を入れるか、めあてを自分で決めるのではなく、選択にするなどの工夫をすることで家庭を巻き込んだ取組になるのではないだろうか。教職員全体で検討してほしい。

メディアコントロールについては、児童・保護者が話題にし、保護者が声かけをしているとの結果が出ているが、これは学校の指導によるものであることからこれからも自信をもって取り組んでほしい。大人も取り組むことで、子どもより意識できる。また、SNSによる児童被害については、様々な場面で話題に取り上げてもらい、SNSの危険性について児童が認識するように学校と保護者が一丸となって行ってもらいたい。

学級懇談で取り上げる等、保護者の意識を高める取組を継続して行うとともに、参加できない保護者への対応についても考えてほしい。家庭問題と関わっているだけに、根気強く取り組む必要がある。家庭教育については、学級懇談以外に講演や話し合いの場を設けて、保護者へ啓発する場を設けることも大切である。

⑦ 開かれた学校づくり

各種通信やホームページでの提示は安定的に行っていることから自己評価は妥当である。今後は、積極的に保護者や地域の人を巻き込む取組を考えてほしい。情報は鮮度が大切なので、更新頻度やタイミングに気を配りながら、一方で教職員の負担になりすぎないように心がけてほしい。また、ホームページでの情報公開は便利なようであり取り扱いが難しいので、リスク管理をしっかりと意識してほしい。場合によっては閲覧にパスワードを付して、写真や動画が見られるようにすることで、閲覧側の保護者の利用頻度や認識を高めることができるのではないかと。学校では様々な取組がなされていることが、場合によっては保護者に伝わりきれていないので、積極的にアピールを行ってもいいのではないかと。

⑧ 学校支援ボランティアを積極的に活用する

自己評価・改善方法ともに妥当である。ボランティアによる学校支援により子ども達は多くのことが学んでいることから、ボランティアと児童の交流については引き続き行ってほしい。地域ボランティアが安定的に増えるように、学校は計画的にカリキュラム・マネジメントの視点をもって人材を活用してもらいたい。そのためには、地域ボランティアと子どもが相互に良い関係を築けるような取組を企画してほしい。

学校における教育課題を的確に捉え前向きに取り組んでいる姿勢は評価に値し、家庭や地域からは教職員への信頼が増している。一方で、教職員が頑張りすぎていることもあるので、教職員の負担にならないように学校の無理のない範囲で効率化してもいいのではないだろうか。

【4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）】

1, 心プロジェクト

- ・大学と連携したSELの授業の取組を行っていく。
- ・保護者へのこまめな連絡の徹底や、人権に関わる学校や学年の取組を、保護者や地域に工夫して発信したり、発信の回数を増やしたりする。
- ・児童が友達からのサポートを実感できるようにするために、「きりりカード」の取組、帰りの会での「良いこと見つけ」の取組、なかよし遊びをより工夫しながら引き続き行っていく。
- ・中学生が参加するあいさつ運動を継続し、発展させていく。
- ・あいさつ・履物・清掃の取組の成果が校内だけでなく、家庭や地域に広がっていくしかけや工夫を考え、実行していく。

2, 学びプロジェクト

- ・相互授業参観を校内だけでなく、総社東中学校区の校園内なら簡単にできるようなしくみをつくる。
- ・授業にミニ作文を書かせたり、考えを発表する際にその考えになった理由を言わせたり、振り返りを細かに行ったりする取組は継続していく。
- ・宿題の出し方を工夫することで、家庭学習時間を増やしていく。
- ・6年生は、長いスパンで宿題を出したり、自主学習に力を入れたり、中学校生活を見据えた取組も継続していく。
- ・人の考えを他の子どもに伝え、理解や指導を深める工夫をし、話し合い活動を組織化する「共有化」を来年度の重点取組として、児童が分かる・できる授業を実践していく。
- ・総社東中学校区の幼稚園、小・中学校で、確かな学力を身に付けていくために、「集団づくり」に視点を当てた取組を推進する。

3, 元気プロジェクト

- ・今年度は長縄の8の字跳び岡山県チャレンジランキングに加入した。来年度は、児童のやる気につながる他の工夫も考え、実行していく。
- ・総社東中学校区で、幼小中連携による減メディアの取組を、さらによりよいものにするために、改善しながら、継続して行っていく。

4, 地域連携プロジェクト

- ・学校支援ボランティアの人数が増え、よりやる気がでるようなしかけや工夫を絶えず考え、実行していく。